

第3回 ローマの香りが漂う街、アルル

ローマの3点セット

1995年の8月に、家内と南フランスを旅行したとき、ゴッホが1888年から1889年にかけて滞在し、大量に作品を残したアルルを訪れました。ゴッホがなぜあんなにアルルに惹かれたのかを、自分でアルルの空気を吸って感じてみたいと思ったからです。

アルルはローヌ河の河口に近い、人口5万人ほどの小さな地方都市です。昔城壁で囲まれていた旧市街は、10分も歩けば端から端まで行ってしまう。旧市街は今でも細い道が入り組んでいて、鉄道の駅も、自動車用の広い道路も城壁の外にあります。

アルルの街を歩き回って驚いたのは、ローマ時代の構築物がローマ以上によく残っていることです。ローマの「コロッセオ」は現在も残っていますが、闘技を行った床はなくなり、外壁もかなり損傷しています。ところがアルルの円形闘技場は、大きさはローマほどではありませんが、現在もほぼ完全な姿で残っていて、今も闘牛



アルルの野外劇場
客席が新設されている。

などの催し物に使われているのです。野外劇場の跡も、現在でも使われていて、新しい観客席が設けられています。浴場の遺跡もありました。当時の

ローマの浴場は、フィットネスクラブや図書館も兼ねた大社交場だったようで、ディオクレティアヌスの浴場やカラカラ浴場の大きさには驚かされます。アルルの浴場の規模はよく分かりませんが、コンスタンティヌス大帝が建てたのだそうです。昔は相当立派なものだったのでしょう。

「闘技場、野外劇場、浴場」この3点セットはローマ人の生活に欠かせないものだったようです。アルルに行くとき、ここがローマ帝国の重要な地方都市だったことがよく分かります。

アルルの街の城壁はもつほど残っていません。一部残っている城壁の外空き地には市が立っていて、野菜や果物を売っていました。こういうところで買い物をして、その地方の生活に触れるのも楽しいものです。タクシーの運転手の話では、週に2回、街の反対側で市が開かれるとのことでした。

ゴッホの「黄色い家」

アルルの駅で買ったアルルの地図の裏には、ゴッホがどこでどの絵を描いたのかが記されていました。この地図を頼りに、ゴッホが描いたカフェのある広場や、ゴッホが自分の耳を切ったあと入院していた病院を訪れました。

ゴッホには、自分が住んでいた家を描いた「黄色い家」という絵があります。そこには今でも建物があったり、レストランになっていました。そこで一休みしてビールを飲んだのですが、どうも建物の形が絵に描かれている建物と違っていました。

不思議に思ってレストランの女性に、「ゴッホの『黄色い家』という絵を知っていますか？」と聞くと、黙って奥へ引っ込んでしまいました。私の片言のフランス語が通

じなかったのかな、もしかして

機嫌が悪くて取り合ってくれな

かったのかな、

と思っ

と、しばらくしてその女性が古

びた写真を2枚持って戻ってき

ました。写真に

は「改築前」と「改築後」と書いてありました。「改築前」

の写真には現在の建物に接してもう一軒小さい建物があり、

ゴッホの絵と同じでした。「改築後」の写真ではその

建物が取り除かれているのです。奥の大きい建物は

現在もゴッホの絵と同じでした。なぜが解けて「安心

しました。

ゴッホには「跳ね橋」という有名な絵があります。その

跳ね橋はもつありませんが、それを別の場所に復元

したものがあつたので、アルルを離れるとき、ホテルから駅へ向かうタク

シーに遠回りして立ち寄りてみました。観光ガイドにも載っていたので、何人かは観光客が来ているの



ゴッホの「黄色い家」の現在の姿
昔は右の建物の手前に小さい建物が隣接していた。

酒井 ITビジネス研究所
代表 酒井 寿紀



E-mail: webmaster@toskyworld.com
ウェブサイト「Tosky World」
http://www.toskyworld.com/

【著者略歴】
1940年生まれ。
1964年 東京大学工学部卒業。
1964年から2002年まで日立製作所グループでコンピュータの開発などIT関係の業務に従事。
2002年 酒井ITビジネス研究所(個人事業)を開業。IT関係の記事を執筆、オーム社の雑誌およびウェブサイト「Tosky World」に掲載。
[趣味] 淡彩スケッチ、エッセイ執筆、旅行。

あります。ローマ時代からのアルル最大の墓地で、中世には有名になってヨーロッパからローヌ河を使って遺体が運ばれてきたのだそうです。

ゴッホは「ゴーギャン」といっしょにここで絵を描いたということ。滞在していたホテルから近かったので、早朝そこへ一人で出かけました。うっすらと茂った森の中は、真夏ののにひんやりとして人影がまったくありませんでした。道の両側には石棺が並んでいて、千数百年来の霊気があたりに立ち込めているような感じがしました。そこに苔むした石造の建造物があったので、そのスケッチを一枚描きました。

インターネットで知り合ったアメリカの絵を描く女性にこの話をしたら、よくそんな気味が悪いところを描いたと驚かれました。

アルルの女

アルルは、「アルルの女」というドレープの小説や、それを基にしたビゼーの曲でも有名です。「ゴッホにもアルルの女」という女性の肖像画があります。

現在ではもちろんアルルの女性も他の地方と変わらない服装をしています。これらの作品が作られた19世紀にはこの地方の特長を色濃く残した服装をしていたようです。現在でも博物館の案内の女性はこの地方の伝統的な衣装を身に付けていました。黒っぽいロングスカートと華やかなシヨールが特長でした。街でもこうした格好で歩いている女性を一人見かけました。

駅の売店で買い物をする、その年配の女性は私に、「ジユ・ヴルメルシ」と言いました。これは「メルシー(ありがとう)でございます」の大変丁寧な言い方で、パリなどではあまり聞きません。数少ない体験からですが、言葉遣いにも古きよき時代のアルルの響きが残っているように感じました。

石棺に囲まれてスケッチ

アルルの街外れにアリスカンという昔の共同墓地が